

## 調査・研究

## 「父の娘」今昔 —かえるの王様から東電 OLまで—

人見佳枝 (HITOMI, Yoshie)

近畿大学日本橋診療所

### 要 約

「父の娘」とはユング派の女性分析家によって1980年代に提出された概念である。この言葉は「父権制の娘」、即ち、個人的な親子関係を越えて「父なるもの」の強い影響下にある女性を意味する。この概念自体は普遍的なものであり、昔から存在するものであるが、新たに脚光を浴びた背景には、女性の社会進出や社会的成功、そしてそれに伴って生じた心理的問題などがあった。それから数十年が経過し、女性の進学や就職は当たり前になった。これに伴って、「父の娘」の課題はすべての女性にとって、より避けて通れないものとなったように見える。本論ではこの概念についてあらためて振り返り、昔話や実際に起った事件などを参考にしながら、現在における「父の娘」について詳細に論じた。

### Abstract

“Father’s daughter” is a concept which was suggested by female Jungian analysts in 1980’s. This means “daughter of patriarchal society” which is like woman under the strong influence of patriarchy. Although this motif is universal, it was paid attention because women started working outside and some of them became successful in the society at that time. While they succeeded in the patriarchal society, they suffered from psychological problems. After a few decades, it is quite normal for women in developed countries to go to school and to work outside. Therefore, the problems of father’s daughter become more unavoidable for every woman in civilized society. In this paper, father’s daughter in current society is discussed in detail through a fairy tale and a real murder case.

キーワード：父の娘 象徴 元型 売春 ユング心理学 かえるの王様

## 1. はじめに

2013年に現政権が打ち出した経済成長戦略の目標の一つに「2020年までに指導的地位に女性が占める割合を30%以上とする」という項目がある。いわゆる男女雇用機会均等法が施行されたのは1972年であるから、40年を経て、我が国においても、女性がより働きやすい社会が実現されつつあるということであろう。日本における取り組みは欧米先進国と比較して、遅れているとしばしば批判される。しかしオリンピックのすべての種目において女性が参加できるようになったのが2012年のロンドン大会からだというのだから（1896年に行われた第一回目のオリンピックに女性は参加できなかった）、単純に比較することも出来ないのかもしれない。

かように、女性の社会進出は古くて新しいテーマである。そしてこのテーマが人口に膾炙するとともに提出され、広く知られるようになった概念のひとつに「父の娘」がある。この言葉はユング派分析家であるシルヴィア・ペレラによって提唱された。「父の娘」という言葉は「父親に特別にかわいがられる娘」という意味で用いられることもあるが、個人的な親子関係を超えて「父権制の娘」とでも言うべき意味を持っている。つまりアメリカのように父権的である社会において、その中で成功していく女性のことを指す<sup>1)</sup>。河合は、父権的価値観の強いところでは、父娘結合の強さは、「父の娘」が息子になる願望に示され、娘も息子として生きようとする、娘はこのために父権社会において「成功」するが、それは情緒の未発達という犠牲を払わされることにもなること、さらにこのような女性は母、母性といったものに対して嫌悪や拒否の感情を持ち、あくまで母から自立した人間として生きているつもりであるが、ふと気がつく、父や夫の持つ価値観に全く縛られていて「父権」を生きさせられていて「本来の私」というのは何なのかがわからないという強烈な不安に襲われることになることがあると述べている<sup>1)</sup>。河合はさらに、日本の特殊な状況について「欧米のような厳しい父性原理ではなく、母性原理に従って生きているので問題がさらに複雑であること、日本の社会で「父の娘」である女性は、男性よりも強く「父権的意識」をもつので、それを社会の中で主張する。論理的には「正しい」のでそれを推し進めようとするが、母権的な男性集団の抵抗にあって潰されそうになる。「正しい」ことが曲げられると思うと、ますます熱心になる。そうするとそれに従って男性の抵抗も強く、正しいことの通らぬ日本社会を嫌になってしまう。あるいは、日本の社会で男性に伍して成功していくために、母権意識をある程度、身につけることになる」と説明している<sup>1)</sup>。

女性も男性とともに学び、働くようになった今、すべての女性は多かれ少なかれ「父の娘」の側面を持つ。従ってこれは、現代に生きる女性すべての共有する課題といって良い。しかし「父の娘」は新しい概念ではない。昔話や神話に無数の「父の娘」が存在することは、この概念が大昔から存在する普遍的なものであることを示している。そしてそこにはその課題を解決するヒントがあるはずである<sup>2)</sup>。そこで本論ではこの「父の娘」について、そのよ

うな言葉が提出されるに至った時代背景、我が国における「父の娘」とそれを取り巻く問題などについて、関連するお伽話や、実在した人物をめぐる現象を例に引きつつ説明を試みる。なお、タイトル及び文中において「東電 OL」という呼称を用いた。これは1997年に実際に起った殺人事件の被害者にマスコミが付けた名前である。この OL という言葉は被害者の生前の職業とそぐわないものの、この言葉自体が、すでにこの事件を象徴するものになっているため、このまま使用すべきだと考えたためである。

## 2. 昔話における「父の娘」

まず、昔話における「父の娘」の一例としてグリム童話「かえるの王様」を提示し、主人公がどのように変容するのかみていくことにする。

「むかしむかしの大昔、まだ人のねがいごとがなんでもかなったころのころ、一人の王様が住んでいました。王様のお姫さまがたは、どれもこれも美しかったのですが、そのなかでも、いちばんすえのかたは、きわだってうつくしく、お日さまなどは、そういうのをたくさん見なれていらっしゃるのに、このおひめさまばかりは、顔をお照らしになるたびに、どうしてこんなにうつくしいのかと、ふしぎにおぼしめすほどでした」というくだりから物語は始まる。以下、あらすじについて述べる。おひめさまはお城の近くの大きな暗い森のいずみのほとりで、黄金のまりをまっすぐに放り上げては、落ちてくるのを下でうけとる遊びが好きであった。ところがあるとき、まりを泉に落として失くしてしまう。泣いていると「ぼてぼてしたいやらしいあたまを水の中からつきだして」かえるが現れ、何故泣いているのか尋ねる。おひめさまが訳を話すと、かえるは「わたくしを、おひめさまのおあいてのあそび友だちにして、おひめさまとならんでかわいらしいお膳へすわらせて、食べものは、おひめさまのかわいい黄金のお皿でたべさせて、飲みものは、おひめさまのかわいらしいおさかずきで飲ませて、おひめさまのかわいらしいおとこのなかにねかせて」もらうことを条件にまりを拾ってきてやる、と持ちかける。おひめさまは請け合うが、はなから約束を守るつもりはなく、まりをうけとるやいなやかえるを置いて城に戻ってしまう。ところがかえるは城までやってきて、約束の履行を迫る。渋るおひめさまに事情を聞いた王様は「おやくそくしたことはどんなことでも、そのとおりにしなければなりません」と言いかえるとの約束を守るように促す。部屋に連れて行ってくれ、一緒に寝たいと言いかえるがこわくておひめさまは泣きですが、それでも王様は「だれにしろ、じぶんがこまっていたときに力をかしてくれたものを、あとになって、ばかにして相手にしないという法はない」と叱りつける。ついに自室にふたりきりになり、かえるは床に入ってこようとする。腹を立てたおひめさまがかえるを壁にたたきつけると、かえるは王子になり、悪者の魔女の魔法にかかっていたこと、おひめさまのほかには、だれひとりじぶんをあの泉から救いだせるものはなかったことを告げる。翌日王子を迎えに家来の乗った馬車が迎えに来て二人は王子の国に旅立つ3)。

物語をユング心理学的な見地から解釈するとき、「物語の始まりにおいて何が欠けていて、最後にそれがどのように変化しているか」という視点でみるのが重要である4)。解釈には無数の方法があるが、おひめさまを主人公として考えてみると、この物語の始まりに登場するのは父と娘のふたりである。母親の存在は語られない。従って主人公は「母なるもの」との関係を持たず「父なるもの」の強い影響下にある女性ということになる。主人公のころはバランスの悪い状態にあり、恐らくそれゆえ、主人公は黄金のまりをなくしてしまう。黄金や丸いものはしばしば、物語において「意識も無意識も統合した全体性」の象徴とされる。すなわち彼女は、自分の心の中心とのつながりを絶たれてしまうのである。そこにいやしい姿のかえるが現れる。かえるの象徴するものは非常に多彩でここにすべてを記載することは不可能であるが、いくつか例を挙げるとすれば、かえるが成長の過程に伴って姿を変えていくこと、水と陸の両方を行き来すること、湿った皮膚を持つことなどから、しばしば変容、復活、女性性などと結び付けられる5)。ひとつの解釈を上げるとすれば、これは強い父性の影響下にある女性の前にどれほど素晴らしい王子様が現れようが、それは彼女にとってはいやしいかえるにしか見えないことを現している6)。そして主人公、かえるの変容を促すのもまた「おやくそくしたことはどんなことでも、そのとおりにしなければなりません」という言葉に象徴される極めて成熟した父性である。「父なるもの」は時に変容を阻み、時に促進するということが、ここに如実に示されている。おひめさまはしぶしぶかえるを部屋に連れて行くが、にじりよって来るかえるに腹を据えかねて、壁にたたきつける。これは主人公が長い間忘れ、失われていた自身の本能とのつながりを取り戻して、攻撃性、怒りを発露した瞬間である。従順な娘が我を忘れて「父なるもの」へ咄嗟に反抗した瞬間、かえるは王子様に変容する。

物語は一人の人間の心の中の布置の変化を現すものとしても、外界における実際の人間関係を現すものとしても見ることができる。そうすると、この物語は「父の娘」が成熟した女性へと変容する過程を内的、或いは外的に象徴していると考えることが可能である。変容が起こるためには成熟した父性が不可欠であることはすでに見てきた。父性の衰退が言われて久しい7)。日本も例外ではない。今の日本で、約束したので娘と同じ布団で寝させろと行ってかえるが家に来たとして、「おやくそくしたことはどんなことでも、そのとおりにしなければなりません」と言える父親がどのくらいいるだろう。「そんなかえるはおとうさんが追い払ってきてやろうと行って、王様はかえるを追い払いました。そして王様とお姫様は末永く幸せに暮らしました」という結末になることのほうが多いのではないだろうか。それがいいか悪いかは一概には言えない。河合は、人間には実にいろいろな道があって、どれがよいか悪いかはあまり言えないこと、一生「父の娘」として幸福に暮らす人がいてもおかしくはないこと、しかしできれば自分はどんな物語を生きているのか、それは他とどれほど異なるのかを自覚している方が、おもしろくもあるし近所迷惑も少ないのではないだろうか、

と述べている1)。もうひとつ考えておかなければならないのは、物語には時間の観念が欠けているが、我々は年をとるということである8)。このため、この事件の背後にある時代精神や、「父の娘」が年をとるとどうなるのか、などについて時間の概念も含めて考えなければならぬ。

### 3. Zeitgeist (時代思潮) としての「頑張れば報われる」

このように「父の娘」は普遍的な概念であり新しいものではない。しかし我々は「父の娘」がかように大きな問題となった時代背景や、文化についても注意を払わなければならない。そこで我が国を例にあげて、社会の変遷を辿ってみたい。1960年から1970年にかけて日本は高度経済成長期にあった。日本が急速に豊かになり、男女平等の思想が行き渡り初めた時代である。東山は高度成長期の影について、拝金主義、物質主義をあげるとともに、本音は能力主義と結果主義（遂行主義）に基づいているにもかかわらず、日本が母性社会の下地が濃厚な国であったため、建前はすべて「平等主義」が貫かれ、結果の差を能力差ではなく、「努力」と「根性」に求めたことを指摘している。これは「頑張れば報われる」というスローガンに通じるものだと思う9)。さらに東山によると、1965年ごろから報告され始めた不登校（当時は学校恐怖症と呼ばれていた）が当初は成績の良い男児であったのが、女児に対する期待も高まるにつれて優秀な女子にも拡大し、さらに高校に行くのが当たり前になってくる時代になると、能力に関係しなくなったという9)。1970年代に入ると神経性無食欲症が相次いで報告されるようになる。当初は成績の優秀な女児に多いとされていた。この疾患における主な症状は、食事をしないということである。それは即ち「変容の拒否」であり、母娘関係の問題を背景にした成熟の拒否が身体的なレベルで表現されているとされる10)。しかし横山はさらに「単純に女性の成熟拒否というところに成因を求められない、女性としての存在論的揺らぎがこの病にかかわっているのではないか」と述べており、疾患と時代背景との関連について考えた場合、興味深い指摘であると思われる11)。

俯瞰すると、戦後、男女平等を始めとする新しい価値観が広まるにつれ、成績優秀な女児にも「良い学校に入る」「良い会社に就職する」といった期待がかけられるようになった。そして「頑張れば報われる」というスローガンのもとで努力が奨励され、実際に素晴らしい成果を上げる一方で、母性とのつながりは断たれ、或いは弱まってしまい、それに伴う問題が次々に起こってきた。それらは当初、限られた女性にしか認められない現象であったが、女性の進学、就職が当然になった今、すべての女性の多かれ少なかれ共有する問題となった。前述のシルヴィア・ペレラがその著書で「父の娘」の概念を提出したのは1980年代である12)。ちょうどこの頃に前後して、我が国ではいわゆる男女雇用機会均等法が施行されている。1986年から1991年までの間、日本はいわゆるバブル景気であったが、その後現在に至るまで数十年の間、経済の低迷、就職難や高い自殺率に喘ぐことになる。このような中、

「頑張れば報われる」という考え方は次第に影を潜め、我々は新たなスローガンを見つけなければならなくなった。しかし価値観が多様化し、右肩上がりの経済発展も望めない今、皆が共有できるスローガンを見つめるのは容易いことではない。そして世界各国で、女性の社会参加のあり方や少子化対策などが議論されてはいるが、我々はまだ答えを見出していない。

#### 4. 「父の娘」と中年の危機

物語と違って現実世界では、「父の娘」も年をとる。ユングはその著書の中で人生を180°の半円に見立て、中年期をその頂点、すなわち90°から始まるとして「人生の正午」とよんだ(13)。具体的には40歳前後に当たり、今まで影になっていた事柄に光が当たり始める時期であり、「中年の危機」mid-life crisisであるとともに、人生の転換点であり、この時期をどのように乗り越えるかが、個性化への道につながるとしている(13)。思春期が長くなると言われて久しい。中年と言われる年代になってもなお、若々しい容姿を保っている女性がインターネットやテレビではもてはやされている。男性の場合、親が存命かどうか、平均寿命やライフスタイルの変化などにより、「中年の危機」に直面する具体的な時期は左右される。しかし見た目がいくら若々しかろうが、閉経をはじめとする生理的な変化は生物学的な年齢に伴って起こるため、女性の場合は等しく、30歳代後半から40歳代後半に何らかの形で中年の危機を迎えるであろうと考えられる。さらにこの年代の働いている女性の多くが、管理職への登用やそれに伴う同僚との葛藤を経験する。本来女性は男性と比較して、収入や役職をあまり強く指向せず、あまり自身を強く前に押し出すことをせず、さらに管理業務よりは患者、顧客などの人と直接関わることを望む傾向があるとされる(14)(15)(16)。このため管理業務が増えることで仕事に対するやりがいを感じられなくなるといったことがしばしば起こる。

ユング心理学において女性の心のなかの男性性をアニムスと呼ぶ。河合は、このアニムスと母性とは葛藤を生じやすいが、女性はこの二者を共存せしめていかなければならないこと、その女性と母親の関係が良い場合は、母親に反発しようとしながらも、彼女は現実にも母の良さを認識しているので、男性性を受け入れつつ、母性を否定することなく共存をはかる生き方を見出してゆくこと、そして男性性の方はむしろ、若い男性に投影することによって結婚し、自分はそれによって母親として生きてゆくことになること、中年になったときにアニムスの問題はふたたび活性化され、それを男性に投影するのではなく、自分の内面に存在するものとして明確に把握することが必要となることを指摘している(17)。この「アニムスを引き戻す作業」はすべての女性に必要なことではないかと思われるが。「父の娘」の場合はどうだろうか。先ほど「父の娘」とは父権社会にうまく適応し、母、母性とながりが薄く、母から自立した人間として生きているつもりであるが、ふと気がつくと、父や夫の持つ価値観に全く縛られていて「本来の私」というのは何なのかがわからないという強烈な不安

に襲われることになることがあるという説を引用した1)。彼女らは「父なるもの」を喜ばせるために競争を好み、野心的、かつ目的志向的で、さらに強迫的に効率的であろうとするが、マリオン・ウッドマンによると、これは偽の男性性であるという18)。またこのような女性のアニムスが現実の男性に投影された場合、先生や上司といった師としての男性がその対象となることが多く、彼らが既婚者であった場合には、不倫関係に発展するかもしれない。このような投影の引き戻しには当然困難を要するだろうし、それ以外の男性と、現実的な深い関係を結ぶことにも多大な努力を必要とするだろう。河合は女性の中にもアニムスを駆使して男性に劣らず仕事をやりぬいてゆける人々も存在するが、問題は彼女がそれだけに満足していけるか、自分の生きて来なかった女性性をどのように彼女自身が評価していくかが重要であると述べ、普通は強いアニムスによって戦っているが、いざ負けそうになった時や、影の世界に入ったときは、低級な女性性を出してきて、奇妙なバランスをとっている人もいることを指摘し、その理由について「アニムスの剣を磨くのにエネルギーを消費しているので女性性は低級なままにとどまっていることが多い」と説明している17)。このような不安定さは、通常は良い社会適応によって隠されている。ユング心理学においてこの機能はペルソナと呼ばれ、社会に適応するためにかぶる仮面、すなわち肩書きや適応的な態度を指す19)。これは社会で生きていくために不可欠ではあるものの、それがあまりにも硬化してくるとその人は内界とのつながりを断たれてしまう。従って「父の娘」の課題とは、自身の内的な要請を自覚し、生きて来なかった女性性に気付き、外界に投影していたアニムスの引き戻しを行い、それらをこころの中に統合し、その後の人生を生きていくための新しい態度を獲得するということになる。これは「かえるの王様」の中に象徴的に表現されているとおりである。課題にいつ向き合うのかはその人によって様々であろうが、前述したように女性の場合には中年期に何らかの形でそのきっかけが訪れるだろうと思われる。

## 5. エナンチオドロミア

「父の娘」の課題にどのように向き合うのかはライフイベントやそれまでの人生によって異なる。多くの場合は、意識することのないまま、内的な作業がなされていくのではないかと思われる。向き合うことなく一生を終えることもあるだろう。それも一つのあり方であって、良し悪しは単純に論じられない。この課題を乗り越える上で困難が生じた場合、心身の不調という形で問題が表面化し、医療あるいは心理療法の対象となることもある。この作業が心理療法において行われた場合はどのような経過をたどるだろう。複数のユング派分析家が、このような女性の夢に否定的な男性イメージが繰り返し現れることを指摘している。クォールズ・コルベットは「女性の持つ豊穡な性質を、干からびて不毛なままに放っておいたり、あるいは氷や雪で凍らせたままにしていると、否定的なアニムスが犠牲者を要求する。否定的なアニムスは自律的に働き、文字通り絞め殺すような力で女性の自我を圧倒するのだ」

と述べて、その否定的なアニムスを、自我、すなわち「私」から分離した別のものとして認識することは、女性の闘いの中で重要な一つのステップであるとしている(20)。この「否定的なアニムス」についてレナードは父娘関係に問題を抱えたクライアントの夢にしばしば「男性性の厳格で権威的なものの腐敗した姿であり、潜在的には老賢人であるにもかかわらず、ないがしろにされたため、墮落して卑劣になった」男性イメージが現れることを指摘し「変態老人」と名付けている。レナードによると、このようなイメージにはいくつかのバリエーションがあり、彼女はそれぞれ「怒れる少年」「阿呆」などと名付けている(21)。これらのイメージはクライアントの回復に伴い、肯定的な男性イメージに変化していく。またその過程において、女性とセックスする夢が報告されることがある。これは同性愛への憧れなどではなく、女性性との関わりを取り戻しはじめた内的な態度の象徴として解釈されることがほとんどである(20)。

課題を乗り越える上で生じた問題が、心身の不調という形をとって現れるとは限らない。内的な問題として扱われず、外界にそのまま投影されることも多い。それが問題であるという認識すらされないことも多いだろう。何かが必要であると認識されていても、その解決を心理療法に求める人は稀で、多くの人はいずれの自助努力で対処しようとするのではないか。例えば中年期に入ってから趣味に没頭したり、アイドルの追っかけを始めたりする人がいるが、これはそのような対処の一つと考えることも出来る。本人がそのことで悩まず、周囲に迷惑がかからず、社会的に問題にさえならなければ、このような対処の仕方は許容されるだろう。現実にはもっと深刻なことがしばしば起こる。先ほど述べた不倫関係などはそのうちのひとつであろう。内面の戦いをやりぬく力のない人、または場の守りがない場合には、本来こころのなかで行われるべきことが現実のこととして行われやすい。それはしばしば、陰惨な事件に発展することすらある(22)。

それまでの意識的な態度に極端な偏りがあった場合、何かをきっかけにその人の内界、外的な態度に極端な反転が生ずる場合がある。このことをユングはエナンチオドロミアと呼んでおり、本来の意味はヘラクレイトスによるとこの意味は「反対方向に向かうこと」である。エナンチオドロミアは自然におけるすべての生命現象の循環を支配する原則であり、これが起こると意識的な行動は抑制され、後には自我の抑制や意識的コントロールを突き崩すという(23)。エナンチオドロミアが起こった場合には、その人は行動をコントロールできないため、しばしば社会的規範を逸脱したりその人の普段の姿からは想像できないような行動をとったりする。こころの全体性を取り戻そうとする働きをユング心理学では個性化というが、これも個性化の過程のうちの一つである。フォン・フランツは実際の個性化の過程について、一般に人格が傷つけられ、それに伴う苦悩によって始まること、この最初のショックはしばしば、それとは気づかれないが、一種の“啓示”となること、逆に自我は、その意志や欲望が妨げられたと感じ、普通はその妨害を何か外的なものに投影すること、或いは外的



にはすべて問題なく見えるが、その背後にある致命的な退屈さに悩み、すべてのことを無意味で空虚と感じているとしている(24)。

もし何かをきっかけに「父の娘」にエナンチオドロミアが起こった場合、その課題、即ち「自身の内的な要請を自覚し、生きて来なかった女性性に気付き、外界に投影していたアニムスの引き戻しを行い、それらをこころの中に統合し、その後の人生を生きていくための新しい態度を獲得する」がラジカルな形で行われることになる。それがもし内界においてではなく外界において行われるとしたらどのような形が考えられるだろうか。例えば、実際の男性に投影された場合にそれが真摯な恋愛関係なのかどうかを見抜けず、結婚詐欺などの被害に遭うかもしれない。そのような関係において相手の悪意を見ぬく能力は、女性性と強く関連するため、「父の娘」において劣る機能だからである。実際の人間であるが遠い距離にある人に対して投影された場合には、前述した「追っかけ」のような形を取るだろう。そして「ねばならない」「べきである」という文脈で物事を考える傾向があるため、完璧であろうとするあまり強迫的になる、あるいは万能感を得るために依存症に陥ってしまうこともある(25)。そして次の章で述べるような売春という形で表現されることもあるだろう。

## 6. シンボルになった「東電 OL」

1997年に、30代後半の独身女性が殺害された。この女性は高学歴で大企業の管理職にあり、経済的に困窮していたわけではないのに、退社した後に売春をしていた。また摂食障害の既往歴があった。出稼ぎ目的で違法滞在していた外国人が逮捕されたが、後に無罪として釈放された。真犯人は未だに逮捕されていない。事件後、マスコミは被害者のプライバシーをヒステリックに暴き立てた。またこの事件をモチーフにした小説やルポルタージュが数多く出版され、著名な人々（主に女性）が被害者女性への深い共感を表明した。共感とは被害者女性がそのような行動に至った過程や心情が理解できると思うことだろうが、こうして概観しただけでは、なぜそこまで皆が心を動かされたのか分かりにくい。高学歴で大企業の管理職にある女性も、売春する女性も、日本の女性の全体から見ればそれほど多くないだろう。両方の経験がある女性となるとさらに数は減るだろう。

いわゆる「東電 OL 殺人事件」と呼ばれた、この事件の被害者が、現在信仰の対象になっているという。彼女が春を鬻いでいた場所の近くにあった地蔵が、いつ頃からか彼女の名前を冠して呼ばれるようになり、日本全国からお参りに来る女性が絶えないというのである。神と仏と人との境界が曖昧な我が国において、亡くなった人が神や仏として扱われるようになることは珍しくない。しかし、20年近くを経てもなお、不特定多数の人の信仰の対象であり続けるということはそれほど起こらない。これはこの事件の、というよりこの事件において起こったと世間一般に信じられていることの核に、日本人にとって、いや、恐らく世界中のすべての人々にとって普遍的な意味が存在すること、そして我々がその問題に未だ結論

を出せていないことに起因している。

このような普遍的な事象をユング心理学において元型と呼ぶ。ユングは、個人的な体験に基づく個人的無意識とは別に、人類共通の無意識である集合無意識の存在を提出しているが、元型とはその集合無意識に由来するものであり、蒼古的なイメージであること、神話的なモチーフを含み、それは全人類に共通するものであること、表象することは不可能であり、表現形態を通してのみ明らかになること、その表現形態は生のプロセスの濃縮されたものであること、などを述べている(26)。また、フォン・フランツは「不可欠に重要な元型的内容が布置される時にそれは必ず新しい宗教の中心的な象徴となる」と述べている(27)。フォン・フランツの考えによると、「東電OL」という存在は彼女に共感し、お参りをする女性にとって、もはや個人ではなく象徴であるということになる。ユングは、この象徴という言葉についても、その著書において定義している。象徴とは、それによってしか表現され得ないもの、意味を包含している限りにおいて生きているもの、すべてのこのころの産物であり、まったく知られていないもの、あるいは部分的にのみ意識されているものを、その時点においても適切に表現しているものであるという(28)。さらにユングは、象徴は時代とともに使い古され、死んで記号となることを十字架の例を上げて説明している(3)。

冒頭に掲げた事件の概要は、世間一般で共有されている事柄ではないかと思う。事実か事実でないかはさておいて、これが皆に受け入れられ、流布した物語であるということは確かである。河合は昔話の発生の心理的側面について、「ある個人が元型的な体験をしたとき、その経験をできるだけ直接的に伝えようとしてできた話が昔話の始まりであると思われる。そしてそれが元型的であるということは、人間の心の普遍性につながるものとして、多くの人に受け入れられ、時代を超えて存在し続けることを意味している」と述べている(29)。さらに河合は神話、伝説、昔話の関係について、すべて無意識の心的過程の表出であるが、伝説は昔話と比較して特定の人物や場所と結びつけて語られるのに対して、昔話はそれらとの思い切った分離があること、神話は一民族、一国家のアイデンティティの確率に関係するものとして、より意識的、文化的な彫琢が加えられていることから、神話と伝説はより意識的な統制を受けているものとして考える必要があり、従って時とともにその特定の場所や国、文化との結びつきの意味を失って、昔話へ変化してゆくこともある、としている(29)。この事件は実際に起った事として今なお我々の記憶に残るものではあるが、一方で、既に物語として人々のこのころの中に生き始めている。これからも時代や、その場所によって形を変えていくかもしれないし、あるいは廃れて忘れられていくかもしれない。被害者の肩書きは(西欧とは異なるが)父権社会において成功した「父の娘」と呼ぶにふさわしいものであろう。これは数多ある現代の「父の娘」の物語の一つにすぎないが、なぜこの物語がここまで多くの人のこのころを惹きつけたかを知るには、売春の持つ象徴的な意味について考えてみなければならない。

## 7. 娼婦の象徴するもの

先程、父の娘の女性性は低級なままにとどまっていることが多いと述べた。ユングはこころの中の女性性をアニマと呼んだ。アニマには4つの発達段階があり、第一段階は生物的な段階、第二はロマンチックな段階、第三は霊的な段階、第四は叡智の段階であるという。この第一段階においては性、即ち肉体的なことが強調され、夢においてはしばしば娼婦のイメージとして表現されるという20)。売春は男性の本能的な部分に関与する生業であるから、低い次元の男性性を惹起しやすいとも言える。アニムスにも4つの発達段階があり、下から順に力の段階、行為の段階、言葉の段階、意味の段階に分類される17)。「力の段階」は肉体的な強さを表す。これは風俗業に従事する女性がしばしば種々の暴力に晒されることと無関係ではないだろう。こころの布置はしばしば外界の実際の出来事と呼応するからである。

ユングは「現在の文化レベルにおいて、男性の圧倒的多数は、女性のもつ母親の意味を乗り越えるほどには進歩していない。そしてこれが、アニマが娼婦という幼稚で、原始的な段階以上には滅多に発展しない理由である、その結果、売春は文明化された結婚の主な副産物のひとつとなってしまっている。」と述べている30)。河合は、同僚の女性に対するエロチックな空想にとらわれて悩む真面目な会社の部長の例を挙げて、「このとき、彼のこころをとらえているのは彼の未成熟なアニマなのである。彼の生真面目な生き方は、枠組みにとらわれて柔軟性に欠け、他人との暖かい接触にも欠けている。彼にとって欠如している肉体性や関係性の象徴として、彼女は目の前に立ち現れているのである。その意味が解らない限り、彼は自分のみだらさを恥じるか、あるいは、皮相な逆転によって、未熟なアニマとの関係に埋没するより仕方がない。」と述べている17)。未熟なアニマ像はこの男性の空想にだけでなく、今日、男性週刊誌やインターネットのポルノサイトに溢れている。このことから我が国における状況も、ユングの時代からさほど進歩していないだろう。

アニマと同義ではないが、内なる女性の発達の各段階に関係する女性イメージとしてクォールズ・コルベットは聖娼という概念を提出している。それによると、聖娼とは古代、性と霊性とが切り離されていなかった時代において存在したとされる神殿の巫女であり、聖なる娼婦である。聖娼となることは成熟した女性となるための重要なイニシエーションであった。しかしユダヤ・キリスト教が世界中を席卷するにつれて性と霊性とは切り離され、前者は忌むべきものとして貶められていった。それとともに人々は両者を結びつける喜びや創造的エネルギーを失っていった。それは高度に機械化、政治化、軍事化され、思考、判断、合理性優位な社会をもたらし、その結果、人々は科学技術の発展を享受する一方で、関係性、感情、自然への気遣いといったものと切り離されてしまい、そのことからくる様々な問題に苦しむようになった。そのため、現代人がこころの中で聖娼との関わりを取り戻していくことが人生を豊かにする可能性を秘めていることを示唆している31)。これはもちろん、売春をすれば心が救済されるなどといった単純なことではない。クォールズ・コルベットは、禁

欲も乱交もともに女神から与えられるものを拒否していること、そして性的に奔放で情緒的な絆を欠いている、あるいはパートナーに対して深い恨みを抱いている女性は自分の中にある最も重要な女性の本質とのつながりを失っており、そのことは否定的なアニムスを生み出すこと、男性が敵であると思うほど敵が実は自分の中にいることに気付けなくなること、そのような場合には神秘的な他者が迎え入れられるという体験は生じてこないこと、男根的な獣に対する怖れは、愛を経験し、変容することから彼女たちを遠ざけてしまうことを述べている 31) 32)。

一神教の伝統を持たない我々が、このイメージをどう位置づけるのかについては、更なる考察を必要とするだろう。我が国においては欧米ほど性の問題はタブー視されて来なかったが、かつては神事の担い手であった「遊び女」が時代を経るにつれて神事と切り離され、遊里に囲い込まれ、さらには芸事とも切り離されて、「自ら遊ぶもの」から「遊ばれるもの」へと貶められていく過程には共通点がある 33)。そして我が国の特色としては能「江口」に見られるように遊女はしばしば神仏と同一視され、理想の他界への憧憬を引き受けていたという 33)。遊女を神仏と同一視する描写は近代小説にも見られるが、恐らく彼女らに対して、人々がなんらかの神聖さを感じていた理由の一つに、彼女らがこの世の人間として扱われていなかったことは挙げておくべきであろう 34)。

以上、娼婦の象徴するものについて大雑把ではあるが概観してきた。単に昔の考えを取り戻せば現代人のこころの問題が解決するというのではない。聖娼のいた時代にも、すでに世俗の売春婦は存在し、彼女らは聖娼とははっきりと区別され、厳しい差別を受けていたというし、古代の人と違って我々は同じ神話を共有していない 31)。ただ少なくとも、低い発達段階にある女性性がしばしば娼婦として表現される一方で、聖娼という特別な娼婦も存在し、各人がどのように自分のこころの中の豊かな女性性とのつながりを取り戻すのかという問題が生じた際、性と生とを結びつける象徴として我々の助けになるかもしれないということは言える。これは同じ物の2つの面、即ち娼婦の聖なる面と俗なる面として見ることも可能であろう。

## 8. イニシエーションと異界

聖娼となることは成熟した女性となるための重要なイニシエーションであったと述べた。イニシエーションとは通過儀礼であり、人生の節目においてその儀式が行われ、それは命がけの試練であり、だからこそ人々は自分の変化を体験することが出来た。近代社会の特徴は、古来からあったイニシエーションの儀礼を消失せしめた点であり、そのことにより近代人は世俗化され合理化された社会に暮らすようになった反面、各人がそれぞれのイニシエーションをどうしていくのか考えなければならなくなった 35)。岩宮によるとイニシエーションには日常空間から離れ、部族全員の信じる絶対的な神に支えられた聖なる場所が必要であると

いう。そのような場所では日常とは別の世界である「異界」が生じやすく、そこでイニシエートされるものは神に会う体験を持つ(36)。

現代において行われる売春にも、イニシエーションの残滓を見ることが出来るかもしれない。夜の街というのはそれ自体が異界である。同じ場所であっても昼と夜では全く風景が変わり、そこにいる人も変わる。危険も増える。しかし決定的に違うのは、そこに何の守りもないことである。経済的困窮を背景としない売春であっても、その動機の一つに金銭があることは間違いない。しかしその背後には恐らく、その人が自身の女性性と向き合い、関わろうとする切羽詰まった要請がある。ところが、いくら自己を救済するための行動であったとしても、そこに守りがなく、気が付かなければ変容はもたらされない。即ちイニシエートされるものは、異界に行ったつもりが、実は行っていない、あるいは行っても戻って来られない。それどころか、実際の死がもたらされることすらあるだろう。現代においてはすべての境界が曖昧になっており、「向こうに行って帰ってくる」というイメージが持ちにくいこともイニシエーションに類する行動が無意味な繰り返しになりがちな原因の一つであろう。これは、過量内服による自殺企図を幾度と無く繰り返す人々、これは比較的若い世代に多い、にも共通することではないかと思われる。

「ヨブへの答え」の中でユングは「キリストは神話に過ぎず、その意味においてフィクションである。しかし神話はフィクションではない。それは継続的に、幾度と無く繰り返されていく真実から成る。それは時に起こり、人々はギリシャの英雄のように神話的な運命を負うことになる」と述べ、キリストを例にあげて、神話的な人物の生涯とはつまるところ普遍的な人間の有り様を表現したものなのだとしている(37)。この時その当人はあたかも「元型に乗り移られた」ような状態にあり、自我は力を失う。前述の東電OLを例にあげるとすれば『「父の娘」元型を生きた』とでも表現できようか。おそらくこのようなことが起こっている時、当人に自分がとっている行動やなぜそうしているのかといったことに関する自覚や自省はないだろう。そして、なぜその人だったのか、ということを考えても恐らく結論は出ない。それは、ただそう(just-so-ness)なのである。不可解な事件が起こると「心の闇」と称して被害者、或いは加害者のライフイベントから何かを見つけ出し、事件と直接結びつけてそれを原因と考えるような論考をよく見かける。ライフイベントは確かに重要だが、仮に何かの転機となった出来事があったとしてもそれはあくまできっかけに過ぎず、原因ではない。起こったことを直線的に結びつけるよりは、すべての事象をその人を巡る布置として考えるべきであろう。我々に必要なのは、無理に原因を見つけ出して不安を紛らわせようとする努力ではなく、分からないものを分からないものとして認める真摯な姿勢ではないだろうか。

## おわりに

現代に生きる女性が自身のこころの布置を補償しようとする時、それはほとんどの場合無意識的な試みであるが、多かれ少なかれそこには自分の中の「父の娘」をどう生きていくのか、自分の女性性とどう向き合うのかという問題を含んでいる。低い発達段階の女性性が外界に向けて表現された場合、それは様々な形をとりうるが、極端な場合、娼婦そのものとして行動化されることもある。しかしその根柢にあるテーマは普遍的なものであり、万人に共有される。イニシエーションを失い、すべての境界が曖昧になった現在、個々人がどう変化を体験し、どうやって異界から戻って来るのかという問題も提示されている。

## 文 献

1. 河合隼雄 源氏物語と日本人 講談社 東京 2003 pp.77-118
2. Bruno Bettelheim, The use of enchantment, Penguin books, London, 1975, pp.25
3. 金田鬼一訳 グリム童話集 岩波文庫 東京 1979 pp.17-27
4. M.L.Von Franz, The interpretation of fairy tales, Shanbhala Publications, Boston, 1970, pp.37-45
5. Dictionary of Symbols, Penguin reference, London 1994, pp.411-413
6. 横山博 女性の個性化 プシケー 10. 1991 pp.25-48
7. Benno Winker, Der Untergang des Väterlichen, Adolf Bonz Verlag GmbH, Tübingen, 1996, pp.7-26
8. Max Lüthi, The European Folktale, Indiana university press, Bloomington, 1982, pp.11-23
9. 東山紘久 現代社会と家族 心理療法第8巻 心理療法と現代社会 河合隼雄総編集 岩波書店 東京 2001 pp.151-195
10. 河合隼雄 昔話と日本人の心 岩波書店 2002 東京 pp.45-75
11. 横山博 表現の砦としての身体 心理療法第4巻 心理療法と身体 河合隼雄総編集 岩波書店 東京 2001 pp.90-96
12. Descent to the Goddess, A Way of Initiation for Women S.B.Perera, Inner city books, Tronto, 1981, pp.7-9
13. Jung CG: Die Lebenswende: Die Dynamik des Unbewusstseins. C.G.Jung Gesammelte Werke 8, Pascher & Cie. A.G. Zürich, 1967, pp.442-460.
14. Buddeberg-Fischer B, Stamm M, Buddeberg C, et al: The impact of gender and parenthood on physicians' careers - professional and personal situation seven years after graduation. BMC Health Services Research 10:40, 2010
15. Susan Pinker (著), 幾島 幸子 (翻訳), 古賀 祥子 (翻訳) なぜ女は昇進を拒むのか——進化心理学が解く性差のパラドクス 早川書房 東京 95-138 2009
16. Jones L, Fisher T: Workforce trend in general practice in the UK: results from a longitudinal

- study of doctors' careers. Br J Gen Pract. 56:134-136, 2006
17. 河合隼雄 無意識の構造 中公新書 東京 1977 pp.102-143
  18. Marion Woodman, Leaving my father's house shanbhala Publications, Boston, 1992, pp.24
  19. C.G.Jung, Collected Works vol.6 "Psychological Types" Definitions, Routledge, London, 1971, pp.465-467
  20. N.Qualls-Corbet (著), 菅野信夫 高石恭子 (翻訳) 聖娼 日本評論社 東京 1998 pp.161-199
  21. L.S.Leonard (著), 藤瀬恭子 (翻訳) 娘の心が傷つく時 人文書院 京都 1987 pp.130-171
  22. Ibid 17), pp.69-101
  23. A. Samuels, A critical dictionary of Jungian analysis, Routledge, London, 1986, pp.53
  24. M.L.Von Franz, 個性化の過程 河合隼雄監訳 人間と象徴 河出書房新社 pp.16-21
  25. C.G.Jung, Collected Works vol.10 "Civilization in transition" Mind and earth, Routledge, London, 1970, pp.40
  26. Ibid. 19), pp.442-447
  27. M.L.Von Franz, The interpretation of fairy tales, Shanbhala Publications, Boston, 1970, pp.30
  28. Ibid 19), pp.473-481
  29. 河合隼雄 昔話の深層 講談社 東京 1994 pp.27-39
  30. C.G.Jung, Collected Works vol.10 "Civilization in transition" Mind and earth, Routledge, London, 1970, pp.40
  31. Ibid 20), pp.17-61
  32. Ibid 20), pp.65-115
  33. 佐伯順子 遊女の文化史 中公新書 東京 1987 pp.31-112
  34. 太宰治 人間失格 新潮社 東京 1961 pp.39
  35. 河合隼雄 イニシエーションと現代 心理療法第1巻 心理療法とイニシエーション 河合隼雄 総編集 岩波書店 東京 2000, pp.3-18
  36. 岩宮恵子 思春期のイニシエーション 心理療法第1巻 心理療法とイニシエーション 河合隼雄 総編集 岩波書店 東京 2000 pp.107-150
  37. C.G.Jung, Collected Works vol.11. "Psychology and Religion" Answer to Job, Routledge, London, 1969, pp.409